

2025年度 公募推薦選抜問題 (90分)
C 日程 11月17日(日)

基礎学力テスト

英 語	1～8 ページ
数 学	9～13 ページ
国 語	15～28 ページ

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 上記の科目から2科目選択してください。
3. 解答用紙には、英語・国語(赤色)・数学(青色)の3種類があります。
4. 試験開始後、解答用紙に受験番号と名前を必ず記入し、受験番号をマークしてください。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄にマークしてください。
6. 問題用紙の余白は計算に使用してもかまいませんが、解答用紙を汚してはいけません。
7. 試験開始後、問題用紙・解答用紙に落丁・損傷がないか確認してください。
8. 数学の問題の冒頭には「解答上の注意」が記入されていますので、必ず読んでから解答してください。
9. 解答済みの答案は、2科目重ねて提出してください。
10. 不要になった解答用紙も回収します。
11. 試験終了後、問題用紙は持ち帰ってください。

国語

1 次の問い(問1～3)に答えなさい。

問1 ア～ウの傍線部のカタカナに相当する漢字を、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。 1、2、3

ア チジヨクに耐えて捲土重来を期する。 1

- ① 恥 ② 痴 ③ 致 ④ 稚

イ 飴と鞭を使い分け、人心をシウウアクする。 2

- ① 承 ② 掌 ③ 奨 ④ 詳

ウ ザンジ休憩したのち、頂上を目指す。 3

- ① 惨 ② 残 ③ 暫 ④ 斬

問2 ア～エの四字熟語の空欄 4、5、7 に入る漢字を、次の①～⑨の中からそれぞれ一つ選びなさい。 4、5、6、7

ア プロジェクトチームの主張は、首尾一 4 している。

イ 常に泰然自 5 としていて大人びている。

ウ 去り際の意味深 6 な物言いが気になった。

エ 素直に従っているが、面従腹 7 にちがいない。

- ① 背 ② 寂 ③ 重 ④ 貫 ⑤ 激
⑥ 肺 ⑦ 若 ⑧ 慣 ⑨ 長

問3 ア～ウの筆者の著作を、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

8、9、10

ア 大岡昇平 8

- ① 『ひかりごけ』 ② 『春』 ③ 『俘虜記』 ④ 『村の家』

イ 堀口大樹 9

- ① 『海潮音』 ② 『珊瑚集』 ③ 『於母影』 ④ 『月下の一群』

ウ 吉村昭 10

- ① 『星への旅』 ② 『海と毒菓』 ③ 『痴人の愛』 ④ 『虞美人草』

2 次の〈文章Ⅰ〉・〈文章Ⅱ〉を読んで、後の問い(問1～6)に答えなさい。

〈文章Ⅰ〉

課題を繰り返しやってみてもすぐに学習の成果が上がるわけではない。しかし、課題を繰り返していると、突然分からなかった課題がわかるようになり、できなかった課題ができるようになる。学習成果は課題に要した時間に比例して上がるのではなく、段階的に向上する。

学習段階の一例を挙げると、第一段階は課題を解決する手順が「分からない」し、課題を解決「できない」段階だ。第二段階は手順が「分かる」けれども、課題が「できない」段階だ。第三段階になると、「分かる」「ことごとく」できる」ことが両立する。認知学習は第二段階がなく、筆算の仕方が「分かる」と、そのまま第三段階の筆算が「できる」状態に到達する。しかし、運動学習では動作の手順が分かってもできない時期があり、これが第二段階に相当する。さらに、運動学習には段階がもう一つあり、動作が自動化すればするほど、動作の手順が「分からない」のに「できる」ようになるという段階、すなわち第四段階がある。A 認知学習では「分かる」ことが「言葉で説明できる」プロセスに対応しているが、運動学習では「分かる」ことが必ずしも「言葉で説明できる」プロセスに対応せず、言語にできない「分かる」世界が存在する。つまり、運動学習は言語化によってこぼれ落ちた、言葉にできない世界にその本質がある。哲学者はこの「言葉にできない世界」を「暗黙知」と呼び、古くから興味をもってきた。

それでは学校教育で運動学習を含む音楽、美術、体育の実技教科と技術家庭科の実習では、教師は「分からない」が「できる」ことで課題を教えたことになり、子どもたちはそれで課題を学習したことになるのだろうか。スイミングスクールやピアノ教室では「できる」だけでよいが、学校教育は「できる」だけでなく、「分かる」立場をとらざるをえない。したがって、B 技能を含む教科教育は必ずしも言葉で説明できなくても、熟練者の「分かる」世界を明らかにしなければならない。

熟練者の動作は速く正確でなめらかである。つまり、熟練者は誤差修正に関わらずに運動を行い、習得した運動記憶に基づき、予測に先導された動作を遂行する。熟練者の動作は自動化しているから言葉で説明しづらくなるとよく言われる。その中身は熟練者が初心者に比べて中枢での処理時間が非常に短く、自分の動作の情報処理過程を意識的にたどれないからだ。第四段階の「分からない」はそういうレベルからみた「分かりづらさ」である。それでは熟練者は自分自身の動作をどう理解しているのだろうか。すでに熟練者の動作を説明した中にその答えはある。熟練者は自分の動作の「なめらかさ」を感じ、自他の動作を「予測」できる。他者の動作の予測は自分の運動記憶に基づいて他者の動作を「なぞる」こと(シミュレーション)によって得られる。さらに、熟練者は動作遂行中の自己と環境に対して「適切な注意の分配」ができ、新たな課題に対して、習得した「技能の柔軟な適応」ができる。

分析哲学のライル(Ryle)は知識を「事柄(の内容)を知る(知)」(Knowing that)と「方法を知る(知)」(Knowing how)に分けたが、言語化ができない「分かる」プロセスは「方法を知ること」と重複する。ライルは「事柄を知ること」をあまり分析せず、「方法を知ること」がそれ自体十分知的といえる条件を明らかにしようとした。状況や文脈の変化に応じて、常に高い技能を示す動作は、それについての説明や言葉による表現とは無関係に知的である。ライルは頭の中の知的操作である計算や論理的推論も、「元は動作として表出させた「技能が内面化」したものであり、結局は「方法を知ること」の問題とみなせると考えた。ライルが「方法を知ること」を強調した背景には、全てを言葉で教え、学ばせようとした「頭でっかちな」主知主義への批判が含まれている。

脳は認知学習でも運動学習でも、Xを関係づけ、この関係性を内部モデルとして獲得する。この内部モデルの獲得こそがライルのいう「技能の内面化」だ。内部モデルという記憶は学問分野によって表象、認知構造、プログラムなどと言い換えられ、このモデルを使って近未来がシミュレートされて予測される。内部モデルとシミュレーションの関係は、天気予報が過去の膨大なデータから、近未来の天気図をシミュレートすることとよく似ており、内部モデルを使って近未来がシミュレートされなければ、滑らかな会話もスポーツも成り立たない。

運動学習も最初は言葉によって動作の手順を理解する認知学習が含まれているが、その手順をからだの動きに変換すると言葉で表現しづらくなる。認知学習は脳皮質で処理されているので言語で表現できる。しかし、運動学習では動作の手順が脳皮質で企画されるが、その手順がからだの動きに変換される過程で、意識がある脳皮質での情報処理が無意識な皮質下の脳基底核や小脳へ移行し、言語化が不可能になる。脳皮質もどの筋肉をどのくらいの力でどのようなタイミングで動かすかを言葉で表現できるほど、からだの動きを事細かに処理していない。つまり、脳皮質は骨格筋のことを知らずに、動作パターンを知っているだけかもしれない。このような情報処理過程を全く考慮せず、運動の学習と記憶は俗に「からだで覚える」と表現され、「運動記憶」という術語が現在でも人口に膾炙されることはほとんどない。

それでは運動の学習と記憶から教科教育をみるとどうなるのだろうか。ライルの「技能の内面化」から考えると、実技、実習、実験を含む教科は運動の学習と記憶が認知、すなわち「知ることを促進するという観点を重視すべきである。^Cこの観点に立てば、学校体育に大きな位置を占めている「体力づくり」は変更を迫られるだろう。体力づくりである筋力や持久力の強化は骨格筋と呼吸・循環系の機能に關与している。体力トレーニングはその時間に正比例して効果がみられるが、ある一定の水準まで達すると頭打ちになり、トレーニングを怠れば元に戻り、筋力や持久力は記憶されない。一方、運動スキルはすでに述べたように段階的に向上していく。運動スキルの練習は神経系の働きに基づいて記憶されているので、習得後に練習をしなくとも、パフォーマンスはあまり低下しない。

〈文章Ⅱ〉

日本古来の「わざ」の習得は、「模倣」「非段階性」「非透視性」に支えられ、西洋の芸術の段階的学習論と大きく異なる。西洋は何かにつけて対象を部分に分解し、部分を組み立てて全体を捉えるので、練習も部分から始まり、全体へとまとめていく。対照的に、日本舞踊は対象を部分に分解せず、対象全体を一つとみなし、一つのものとして稽古を通して身につけていく。このように説明すると、^D西洋の芸術は分習法で練習し、日本舞踊は全習法を採用しているように思える。しかし、全習法は部分の相互作用を前提としているが、日本舞踊の稽古には部分が存在せず、全体があるだけである。日本舞踊はひたすら全体の模倣に励み、師匠の見えない判断基準を模索することになる。このように、日本舞踊の稽古は西洋の段階的学習論と異なり、舞踊を部分に分解してしまうと、舞踊の重要なものが欠落することを恐れているかにみえる。おそらく、日本舞踊の重要なことは「間」であり、部分から全体を組み立てていくプロセスでは「間」が獲得できないことを恐れているのだろう。

一方、日本舞踊の師匠が弟子に与える指示の仕方は、運動学習における教師のインストラクションの与え方に多くの示唆を与える。師匠は踊りの急所やどうしても弟子がうまく動けない時に、簡潔な独特の言い回しで弟子に指示を与える。腰や膝の動きを指示する時、「腰の高さは何センチぐらいに」とか「膝を何度ぐらいに曲げて」というような観察語は決して使わず、「腰をもっと入れて」とか「膝を柔らかく」という生成語を用いる。観察語とは外側から観察した、自然科学で使われる言葉である。

それに対して、生成語とは「どんなつもりでやるとよいか」というような、動きを作り出す側の「心づもりする（留意する）」言葉だ。つまり、「……しようとしてみる」とか、「……のつもりになる」というのが生成語であり、跳び箱の指導の時、「着手をからだからつき離すようにする」は生成語によるインスタラクションであるが、「腕を支点とした体重の移動」は観察語によるインスタラクションである。

このような日本舞踊の指示の仕方は、実技指導における教師のインスタラクションが生成語であるべきであることを教えている。動きを自然科学的に記述する生理学や運動力学は、実技指導をする教師側の知識であり、教授法を支える科学であるが、学習者に教える教授内容ではなく、観察語は子どもたちに伝わりにくい。それを克服するために、教師は自分自身もっている動作に伴う動きとからだの感覚を学習者にも同様に喚起するために、動作を比喩的に表現する「わざ言語」を工夫すべきであり、教科教育の研究者はそれを体系化しなければならない。

（文章Ⅰ）（文章Ⅱ）はともに、乾信之『脳はどのように学ぶのか——教育×神経科学からのヒント』京都大学学術出版会による。なお、本文中に一部省略したところがある。）

問1 傍線部A「認知学習では『分かる』ことが『言葉で説明できる』プロセスに対応している」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

11

- ① 手順が「分かる」けれども、課題が「できない」第二段階までしか存在しない運動学習と異なり、認知学習には第二段階がなく、「分かる」と、そのまま第三段階の「できる」状態に到達することができるから。
- ② 言語化によってこぼれ落ちた、「暗黙知」と呼ばれる言葉にできない世界にその本質がある運動学習と異なり、言語化された知である認知学習は、「言葉で説明できる」プロセスがその本質といえるから。
- ③ トレーニングを怠ってもパフォーマンスがさほど低下しない運動学習と異なり、認知学習は課題を繰り返すうちに突然「分かる」ようになり、課題を解決する手順を言葉で説明できるようになるから。
- ④ 無意識な大脳皮質下での働きに基づいて行われ、言語化できない領域が存在する運動学習と異なり、認知学習は意識がある大脳皮質において処理されているため、動作の手順を言語化して理解しているから。
- ⑤ 動作の手順が大脳皮質で企画され、その手順がからだの動きに変換される運動学習と異なり、認知学習は大脳皮質で情報処理が行われているため、「分かる」と「できる」と「こ」とが両立しやすいから。

問2

傍線部B「技能を含む教科教育は必ずしも言葉で説明できなくても、熟練者の『分かる』世界を明らかにしなければならない」とあるが、筆者が言おうとしていることはどういうことか。(文章Ⅱ)を踏まえた内容として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

12

- ① 学校教育では技能として「できる」ことよりも、知識として「分かる」ことを教えないければならないため、教師が「分からない」場合は「分かる」熟練者を招いて、自身の代わりにインストラクションすべきであるということ。
- ② 技能を含む教科教育では、課題を解決する手順が分かり、「分かる」と「できる」と「こ」とが両立できるようになるまで段階的に向上していくことが重要なので、西洋のように段階的学習論を取り入れるべきであるということ。
- ③ 技能を含む教科の実習では、「分からない」けれども「できる」という状態では、子どもたちは課題を学習したことにならないため、簡潔な感覚的な言い回しで指示を与えるのではなく、客観的で具体的な動きを指示すべきであるということ。
- ④ 日本舞踊の師匠のような熟練者は、自分の運動記憶に基づいて他者の動作を「予測」し、自己と環境に対して「適切な注意の分配」ができるが、運動学習を含む実技教育においては、教師もそれを模倣すべきであるということ。
- ⑤ 生理学や運動力学に基づいて科学的に説明する観察語は子どもたちに伝わりにくいため、教師は動作を比喩的に表現する生成語を用いて、「暗黙知」といべき自身のからだの感覚を子どもがイメージできるように工夫すべきであるということ。

問3 本文中の空欄 X に入る表現として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 13

- ① 自らが発した出力とその結果生じたパフォーマンスや外部環境の変化
- ② 計算や論理的推論という頭の中の知的操作とそれを表出させた動作
- ③ 「事柄の内容を知ること」と「方法を知ること」が知的といえる条件
- ④ 外部モデルと過去の膨大なデータをもとにしたシミュレーション
- ⑤ 高い技能と言葉による表現とは無関係な「分かる」プロセス

問4 傍線部C「この観点に立てば、学校体育に大きな位置を占めている『体力づくり』は変更を迫られるだろう」とあるが、筆者はなぜこのように言うのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 14

- ① 実技、実習、実験を含む教科では、ライルが重視したように、運動の学習と記憶によって「事柄を知ること」を促進すべきであり、ある一定の水準に達すると頭打ちになるような体力トレーニングを続けても、あまり意味がないから。
- ② 運動学習では、「分かる」ことが「言葉で説明できる」プロセスに対応しないため、機械的にトレーニングできる「体力づくり」が優先されているが、学校教育では、生徒が言葉で説明できないまでも「分かる」ようにしなければならぬから。
- ③ 「体力づくり」はトレーニングした時間に比例して成果が上がるが、一時的に筋力や持久力を強化するにすぎず、神経系の働きの基づいて記憶される運動スキルの練習によって、技能の内面化を図ることを重視する必要があるから。
- ④ 運動の学習と記憶を「からだで覚える」と捉える観点に立つと、骨格筋と呼吸・循環系の機能に關係する「体力づくり」は、大脳皮質から大脳基底核や小脳へ移行するという情報処理過程を無視していることが分かるから。
- ⑤ 体力トレーニングは、積み重ねるほど身体能力が飛躍的に向上するが、言葉によって動作の手順を理解する認知学習が含まれているため、「体力づくり」には効率が悪く、やがて軽視されるようになると考えられるから。

問5 Aさんは、傍線部D「西洋の芸術は分習法で練習し、日本舞踊は全習法を採用しているように思える」について、〈文章Ⅱ〉の内容を踏まえて「分習法」「全習法」「日本舞踊の稽古」の違いを考え、【メモ】にまとめた。空欄Y、Zに入る表現として最も適当なものを、後の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

【メモ】

分習法、全習法、日本舞踊の稽古

・分習法：課題を部分に分け、Y。

例：テニスの場合

↓ストローク、サーブなどに分けて練習したのち、ゲーム(実戦)に入る。

・全習法：部分同士の関係を意識しつつ、課題の全体をまとめて一度に行う。

・日本舞踊の稽古：一連の動きを通して稽古することで、Z。

Y
15

- ① 運動の構成要素を選択的にトレーニングする
- ② 部分の相互作用を意識しながら、全体へとまとめていく
- ③ カリキュラムを段階的に設定し、苦手意識を克服する
- ④ 各部分の基礎を完成させてから、全体を組み立てていく

Z
16

- ① 師匠の見えない判断基準に気づけるようになる
- ② 師匠が踊りの急所について指導することができる
- ③ 日本舞踊で重要な「間」を習得していく
- ④ 細かい部分の習熟度も併せて向上する

問6 〈文章Ⅰ〉の内容と合致しないものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 17

- ① 分からなかった課題が突然できるようになるのは、課題を繰り返しやっているうちに課題を解決する手順が「分かる」ようになり、同時に課題を解決する方法を使って「できる」状態に到達したためだと考えられる。
- ② 運動学習は、はじめのうちこそ知識として言葉で手順を理解するが、その段階では課題を自力では解決できず、習熟するにつれて、動作の手順を意識できない状態でも自動的に「できる」ようになる。
- ③ 熟練者は身についた運動記憶に基づいて、技能の内部モデルを使って自他の動作を予測できるため、新たな課題に直面した場合にも、習得した技能を状況に合わせて柔軟に適用させることができる。
- ④ 分析哲学のライルは、全てを言葉で教え、学ばせようとする傾向に反発し、技能を習得して動作が自動化したために発生する言葉にできないプロセスこそが、「方法を知ること」が抱える問題点であるとみなした。
- ⑤ 運動の学習と記憶は俗に「からだで覚える」と表現されるが、これは運動記憶によって「技能の内面化」が果たされ、言語化されない「暗黙知」となる過程が脳内で起きていることが広く世間に認知されていないためである。

3

次の文章を読んで、後の問い（問1～5）に答えなさい。

「わたし」（野村）は、自然史博物館で生物の標本画を描いている宮下和恵に、人間の親子の絵のモデルになってほしいと頼まれ、二歳九か月の娘・果穂とともに、博物館内の標本室の一隅にある宮下の仕事場に来ている。果穂は、宮下が描いてくれたライオンとクジラの絵に色を塗っている。

「野村さん——お母さんも一緒に塗ってあげてくれる？ あ、すごくいい感じよ」丸椅子に腰掛けた宮下さんが、鉛筆を握った。

「ただこうやってお絵描きしてればいいんですか」わたしは確かめた。

「そう、こっちは気にしないで。親子で絵を描く姿って、すごく人間らしい光景だと思うの。スキンスリップとか、ごはん食べさせるとかなら、動物の親子でもやるからね」

宮下さんは時どきわたしたちに話しかけながら、鉛筆を走らせる。おしゃべりは邪魔にならないらしい。だが十五分ほどすると、「ダメねえ」と言いつて紙を取り替えた。

「人間を描くなんて滅多にないから、難しいわ」

「動物のほうが描きやすいですか」

「描きやすいというか、一瞬のリズムで描いちやうの。そうでないと、生きた線にならなくてね。もちろん、何枚も描き直すんだけど」

宮下さんは果穂のそばへ来ると、「まあ、上手に塗れてるわねえ」と言いながら、スケッチブックにキリンとウマの絵を描き足した。そしてまたイーゼルに戻り、二枚目に取りかかる。

「いつも、ここで一人で描いてらっしゃるんですか」わたしは訊いた。

「そうね」寂しくないのかという疑問をくみ取つたらしく、宮下さんは笑って応じる。「下絵の段階だと、OKが出るまで先生方の部屋と行ったり来たり。色付けに入ったら、ここに一人でこもる感じかしら。でも、この場所が一番落ち着くのよ。もしかしたら、家よりもね。この机で仕事して、五十年以上だもん」

「五十年——」わたしはキリンを塗る手を止めた。しんとした標本庫をあらためて見直し、その年月を思う。物言わぬ骨と標本に囲まれて、一人黙々と生物画を、クジラを描き続けた五十年——。

「宮下さんは——」訊きたいことがまた口を衝く。「もともと好きだったんですか。その、動物とか、博物館とか」

「好きも嫌いもないわよ」宮下さんはかぶりを振った。「だいたい、当時はわたしみたいな平凡な女が、あれやりたい、これになりたいっていうのは、なかなかね。高校を出たあと、知り合いの紹介で、たまたまこの非常勤職員になったの。伝票の整理でもやらされるのかしらと思ってたら、鳥の骨格標本を作るから手伝いなさいって。驚いたわよ。そんなの見たこともなかったから。それから、小動物とか昆虫の標本作りを一から教わって。わたし、細々した手仕事がりあい好きだから、事務仕事より性に合ってたのよね」

「じゃあ、絵は——？」

「二、三年経った頃かしらねえ。ある先生に、絵は得意かって訊かれてね。子どもときから描くのは好きだったからそう答えたら、報告書に入れる動物のイラストを描いてほしいって。そのとき描いたものはそれなりに褒めてもらえたんだけど、所詮は素人の絵じゃない？ 自分では納得がいかなかったね。仕事の合間に近所の絵画教室に通い始めたの。そしたらそれを知った先生方が、ちよくちよく挿絵の依頼をしてくれるようになって。で、だんだん生物画の仕事が増えていったわけ」

「そうだったんですか。絵画教室で——」

「そう。あとは実地でいろんな動物を描かせてもらって、この線が違う、この色が違うと言われながら、勉強していったって感じ。だから、わたしの絵の師匠は、研究者の先生方と、標本たちね」

「かほちゃんも、おえかきならう」果穂がわたしを見上げて言った。宮下さんとの会話を、何となく理解していたらしい。

「あら、それはいい考えね」宮下さんが大げさに眉を上げる。「きつと楽しいわよ」

「絵画教室って、結構お金がかかるものなんですか」わたしは訊いた。

「そうねえ。小さいうちは月謝だけで済むだろうけど、本格的な画材を使うようになってきたら、それなりにかかるかもしれないわね」

そのとき、出入り口のドアが開く音がして、ぺたぺたという足音が近づいてきた。

「おや、モデルさん、見つかったの？」現れたのは、網野先生だ。

「そうなんです」宮下さんが気安い声で応じる。「野村さんと、果穂ちゃん。先生のトークイベントに来てくださった方なんですよ」

「ああ、そりやどうも」網野先生はひげを撫でながら、軽くわたしに頭を下げる。「でも、お嬢ちゃんには話が難し過ぎたねえ」

「だから、果穂ちゃんのほうは、わたしと館内を観て回ってたんす」

「なるほど」網野先生がにんまり口角を上げた。「アロペアレンディングですか」

「そうそう」宮下さんも声を立てて笑う。

「それ、何ですか」わたしは訊いた。

「イルカやクジラの群れではね」先生が答える。「その子の母親以外のメスが、子育てを助けることがよくありますね。アロペアレンディングというんです。シャチのグループでは子育てを終えた『おばあさんシャチ』が大事な役割を果たしますし、マッコウクジラの場合は母親が餌を探りにいつている間、群れの『おばさんクジラ』が保母になるんですよ」

「父親は——」つい声が硬くなる。「オスは、何をしてるんですか」

「とくに何も」先生はかぶりを振った。「子どもは母系グループの中で過ごしますからね。大人のオスは、いたりいなかったり」

「……そうなんですか」

「とはいえ、実は我々も——」先生が苦笑いを浮かべる。「いい歳して、いまだに宮下さんにお守りしてもらっている状況でしょ」

「何言ってるんですか」宮下さんは手で空気をはいた。

「いやいや、真面目な話」先生はわたしに向かつて言う。「定年後も館に残ってくれなきゃ困ると、みんなで駄々をこねましてね。生物画にしても標本作りにしても、宮下さんがいてくれないと、我々も仕事にならない」

「どれだけお役に立ててるのか」宮下さんが謙遜する。

「科学ってのは、研究者一人の力じゃあ進みませんからね」先生は真顔で続けた。「どんなこともそうでしょうが、いろんな人との協力や助け合いで、成り立っているわけですから。自分ができないとき、困ったときは、助けを求める。一人で何でもやろうとしても、いざれ行き詰まります」

まるで、自分のことを言われているような気がした。目を伏せたわたしに、宮下さんが言う。

「まあ、わたしなんかは、たまたま今のお役目をおおせつかったただけなんだけど。でも——」

宮下さんは鉛筆のお尻で壁のポスターを指し、目尻にしわを寄せる。

「あれを見るたびに、思うのよ。たまたまって、すごいことだなんて。たまたま人に紹介されて、ここに五十数年。学者でも画家でもないのに、クジラの絵を八十三体も描くことになるんだもんねえ」
可^お笑^かしむような表情の中に、誇りと感慨が混ざっている。そんな宮下さんの笑顔が、わたしにはまぶしかった。

A この人とわたしの違いは、何だろう。

特別なものには当たらずに生まれてきたのはお互い似たようなものに見えるのに、どうしてこんなにも違うのだろうか。

網野先生は宮下さんと簡単に仕事のことを打ち合わせると、わたしたちに「では、ごゆっくり」と言っ出て行った。

宮下さんはまたスケッチに戻った。果穂はウマの色塗りに取りかかっている。

しばらく沈黙が続いたあとで、わたしは言った。

「宮下さんは、なんでわたしをモデルにしようと思ってくださったんですか」

「決まってるじゃない。とつても素敵な親子に見えたからよ」

胸が詰まった。B 色鉛筆を握る手に、力がこもる。

違う、全然。この人は、何もわかってない。

「——そんなじゃないです」勝手に唇が動いていた。「うちも、わたしとこの子、二人なんです。わたし、離婚してて」

「ああ……」宮下さんが手を止める。「そうだったの」

真つすぐわたしを見つめてくる彼女の顔に、後ろのポスターのシロナガスクジラが重なった。

「だから、素敵なんかじゃないです」震える声が止まらない。「わたし、きつとこの子に何も与えてやれませんか。何もしてやれない」

宮下さんは、黙ったまま線を何本か描き足すと、⁽²⁾おもむろに立ち上がった。イーゼルから紙をはずし、こちらに持ってくる。

わたしたちの前に置いたその紙には、スケッチが出来上がっていた。夢中で色を塗っている果穂と、色鉛筆を手に寄り添うわたし。

ふと、絵の中の果穂が、昔のわたしに見えた。色塗りではなく、ビーズで何か作っている。そして、わたしに寄り添っているのは——。

「これ、かほちゃん？」果穂が絵の自分を指差して言った。

「そうよ」宮下さんが微笑^{ほほえ}みかける。「C 果穂ちゃん、いいお名前もらったわね」

「うん、かほちゃんだよ」

宮下さんは、今度はわたしを見て言った。

「果実の果に、稲穂の穂でしょ。きつと何か実るわね」

「え——」

名前を考えたのは、わたしだった。「かほ」にしようとまず決めて、いい字だなと思う漢字を当てたのだ。生まれたばかりの、この子の顔を見ながら——。

「野生のイルカにもね、名前のようなものがあるの。』^bシクネチャーホイッスル』という鳴き声なんだけど、個体ごとに違っていて、群れの中でお互いを呼ぶのに使われているかもしれないですって。だけど、子どもの名前に願いを込めたりするのは、きつと人間だけね」

宮下さんは、もう一度果穂に優しい目を向けた。

「大事なのは、何かしてあげることじゃない。この子には何か実るって、信じてあげることだと思

うのよ」

目の前のスケッチに、ぽたりと水滴が落ちた。鉛筆の線がにじむのを見ているうちに、それが自分の涙だと気がついた。

そうなるよ、もうだめだった。わたしは、声を上げて泣いた。

(伊与原新「海へ還る日」『八月の銀の雪』新潮社所収)による。)

問1 傍線部(ア)～(ウ)の語句の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

18、19、20

(ア) かぶりを振った

18

- ① いら立ちを表した
- ② 否定した
- ③ そわそわした
- ④ うつむいた
- ⑤ 考え込んだ

(イ) 目尻にしわを寄せる

19

- ① 目くばせする
- ② ならみつける
- ③ ほほえむ
- ④ 横目で見ると
- ⑤ 険しい顔つきになる

(ウ) おもむろに

20

- ① あわてて
- ② 不意に
- ③ のろのろと
- ④ もったいぶって
- ⑤ ゆっくりと

問2 傍線部A「この人とわたしの違いは、何だろう。」とあるが、「わたし」はなぜこう思ったのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

21

① たまたま知り合いの紹介で博物館に勤めて、動物のイラストを描くようになったという偶然の積み重ねで、充実した五十数年を過ごし同僚の信頼まで得ている宮下のことが羨ましくて、悔しい気持ちになったから。

② 学生でも画家でもないのに、絵を描く喜びや先生方に頼りにされているという自負を隠そうともせず、誇らしい表情を見せる宮下に嫉妬し、自分も宮下のようになりたいという気持ちになったから。

③ お互いに、特別な才能を持ち、恵まれた環境に生まれてきたわけではないのに、宮下と自分の境遇があまりにかけ離れていることに対して、不平等な現実を恨みたい気持ちになったから。

④ 不如意な生活の中で誰かに助けを求めることもできず自信を失っている自分に比べ、過ごしてきた日々を慈しむような笑顔を見せる宮下に、自分には何が足りなかったのかと、わびしい気持ちになったから。

⑤ 網野先生の言葉に触れて、自分がいつしか助け合いの精神を忘れていたことに気づかさず、人望のある宮下にあつて自分にはないものが何なのか、向き合っていかなければならぬと冷静な気持ちになったから。

問3

傍線部B「色鉛筆を握る手に、力がこもる。」とあるが、ここからうかがえる「わたし」の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

22

- ① 離婚して子どもに満足な暮らしをさせてやれるのかもわからない状況の自分たちは、「素敵な親子」などではないと、強く否定しようとしている。
- ② 表面的な部分だけで自分たちのことを「素敵な親子」と信じてモデルにしようと思ってくれたと知り、宮下に離婚していることを切り出すのを心苦しく思っている。
- ③ 離婚による生活の不安や、果穂を不憫に思う気持ちを抱え、子どもに何もしてやれない自分には、「素敵な」母親と言われる資格はないと自分を卑下している。
- ④ 「素敵な親子に見えた」と褒めてくれた宮下の好意を受け、本当は離婚していて母子二人の家族なのだと打ち明けて誤解を解かなければと気が急いでいる。
- ⑤ 離婚については、果穂に申し訳ないことをしたと思っているのに、事情を知らない相手に無神経なことを言われ、傷口をえぐられるような痛みを覚えている。

問4

傍線部C「果穂ちゃん、いいお名前もらったわね」とあるが、このときの宮下の様子の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

23

- ① 子どもに豊かな生活をさせることが親の務めだと考えているらしい「わたし」に対して、その間違った考えを改めてもらい、親の務めは子どもを信じて見守ることだという自覚を促そうとしている。
- ② 「果穂」という名前が、「果実の果に、稲穂の穂」という「実り」を象徴する名前であることに気づき、その名前をつけた「わたし」の願いを慮って、当時の気持ちを思い出しなさいと諭そうとしている。
- ③ 子どもに名前をつけるときの親は、誰もがその子の幸せを願っていることを伝えることで、「果穂」という名前をつけた「わたし」も、親としての務めを十分果たしていると認めあげようとしている。
- ④ 「素敵なんかじゃないです」と震える声で言い、泣きそうになっている「わたし」の気持ちも思いやり、離婚してもしっかり子育てをしている「わたし」も素敵な母親であると、励まそうとしている。
- ⑤ 果穂に何もしてやれないと自分を責める「わたし」に、「果穂」という名前そのものが、親としての愛情が込められた贈り物であると伝えることで、「わたし」の気持ちを少しでも軽くしたいと思っている。

問5

波線部 a 「アロペアレンディング」、波線部 b 「シグネチャーホイッスル」の表現は、本文中でどのような役割を果たしているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

24

- ① 波線部 a は、社会が助け合いで成り立っているという網野の言葉を引き出して、宮下が将来「わたし」を支える人物になることを暗示し、波線部 b は、名前にはお互いを呼ぶという目的以外の意味があるということを示すという役割を果たしている。
- ② 波線部 a は、群れの中の助け合いを示すことで、一人で行き詰まっている「わたし」の状況を浮き彫りにし、波線部 b は、子どもの名前に願いを込めるのは人間だけだという宮下の言葉によって、「わたし」の心が癒やされる場面へと導く役割を果たしている。
- ③ 波線部 a は、宮下が群れの「おばさんクジラ」のように面倒見の良い人物であることを印象づける役割を果たし、波線部 b は、群れの中で個を際立たせる鳴き声の存在を紹介することで、人の群れである社会で声を上げることの大切さを示す役割を果たしている。
- ④ 波線部 a は、群れの中で子育てを助けるのが母親以外のメスであることを示すことで、元夫が子育てに非協力的であったことを暗示し、波線部 b は、元夫が果穂の名前を決めることに関わらなかったという過去を明らかにする役割を果たしている。
- ⑤ 波線部 a は、イルカやクジラが集団で子育てをすることを示し、波線部 b は、野生のイルカがお互いを呼ぶ鳴き声があることを示すことで、海洋生物たちや博物館の人物との触れ合いにより、主人公が立ち直る姿を効果的に描く役割を果たしている。